

たいへいきちゅうしんこうしゃく

# 太平記忠臣講釈

## 〔解説〕

明和三年（一七六六）大阪竹本座初演。近松半二、三好松洛、竹田文吉らの合作。全編を忠臣蔵に仮託した、忠臣蔵ものの一つ。重太郎の妻おりゑの書き置きが有名です。

## 〔喜内住家の段 あらすじ〕

矢間喜内は浅野家の馬廻り役で、その息子が重太郎です。喜内は病身で重太郎の子、太市郎は疱瘡にかかっており、一家は貧しさに苦しんでいました。そのため、重太郎の妻おりゑは、惣嫁（辻君）となり、重太郎の妹は祇園で奉公をしています。ある日、重太郎が帰ってきて、他家への仕官を告げます。喜内は怒りますが、重太郎は、忠義を貫くため、家族との縁を切り、太市郎を斬って、仇討ちに出立して行くのでした。

## 喜内住家の段

納戸へ連れて入る。

弓矢は家に伝えても、今は仕へん君しらず、羽なき  
矢間重太郎、羽織、野袴、大小も、昔に返る立派の  
骨柄、

「頼みませう」

と、家来が案内、

「おりゑ誰やら見えたぞや」

「アイ」

と何気もなつかしい、夫の顔にはつとばかり、出て

逢ひたさも面目涙、胸に痞の上り口、

「何をうちくしてゐやる、どなたぢやこれへ、ヤ

ア重太郎か」

「母人先は御健勝で」

「ヤレその挨拶はゆるりと、マアく内へ入りや、  
よう戻つてたもつたの、何やかや話す事、アノ坊が  
庖瘡しての、コレ嫁、抱いて来て顔見しやいの、こ  
れはしたり、何をうつとりしてゐやる、ム、余  
り嬉しさに気上りがしたの、ソレ茶も汲んでおぢや  
いの」

と、母の悦び、

「イヤくお構い下されな、ヤイ関内、身も隙は取  
らぬ、しばらくの間旅宿へ往て待つてをれ、何か差  
置き親人の、御機嫌いかが」

と手をつけば、

喜内もにこく打微笑み、

「浪人の尾羽を枯らし、旅やつれもさぞあらんと思  
ひの外、顔色も健やか、衣服の美々しさ、かはらぬ  
体に先ずは安堵」

「ハツア、成程、その御案じもご尤も、拙者も方々とうろたへまわり、このままに朽ち果てんかと存じたに、いまだ武運尽きず、よろしき主取りを仕り、ご覧の如く、身の廻りも主人より拝領、すなはち旦那の御供致し、鎌倉へ罷り下る、折から親人御病氣の様子、承つて心ならず、立ちながら、ちよとお暇乞ひ、ナニ女房二親を預り長の月日、さぞその方も心遣ひ過分々々」

と、常にかわらぬ夫の顔色、機嫌よいのも疵持つ足の、裏ではないかと案じゐる。喜内いざりし膝立て直し、

「ム、奉公の口あつて、知行にありついたとな、ヤイ重太郎、女は二人の夫を持たず、侍は二人の主に仕ゆるを、人非人と卑しむ事、母の胎内を出づるよ、腸にしみ込んである事、わりや忘れたな、その

根性とは知らず、妻子を捨て、親を捨て、再び家に帰らぬは、あつぱれ侘は武士なりと、心の自慢、親の病氣の見舞に來たさへ、不覺者と思ひしに、二君に仕へて、その腐つた魂の、大小をひけらかしに來たか、コリヤヤイこの喜内はな、貧苦にはせまつても、重代の具足は質にも入れず、チエ、口惜しや、行歩自由ならば、古主の御無念を晴らさんものと、牙をかんで日を送る、寢におとつた大腰ぬけ、女ならば密夫同然、対面もこれまで、身の穢れた犬畜生、長居せばウヌ手打にする」

と、老の怒りの一筋も、『もし我事を知つてか』と、女房が胸も二つ玉、はたと立切る一間のうち、思案を極め重太郎、

「お暇申す」  
と立上がる。

「ア、コレ待つてたも、なんぼ親でも今の悪口、腹の立つは道理々々、もぎどくなは日頃の氣質、そなたのありつきも孝行の為ぢやもの、ああ云はしやつても底心に、何の悪う思はしやろ、何事も了簡召されや、ヤ」

「イヤサ拙者も急の御用、隙取れば主人へ不忠、罷り帰るこの後は、もはやお目にもかかるまい」

「ハテ気の短い、急ぎの用なら留めはせまいが、わりない無心があるはいの、そなたが他国めさつた後は、何を活計に世を渡らうあだてもなし、道具諸色も売払ひ、やうく嫁女の賃仕事や、乳呑み子抱へて人に雇はれ、それはく憂き艱難、口で云ふやふな事ぢやない、喜内殿の病氣の上に、孫が疱瘡、人參と熊胆で、仕立てにやならぬ煩ひに、常の薬の才覚さへ、石で手詰めた貧の病、旅の遣ひは有合とや

ら、親子の中でも金銀の、無心はどうやら云ひにくけれど、なう嫁女」

「アイく、モよそ外の事ではなし、主ぢやとて、何の否がござりませう」  
と云ふを打消し、

「ハテさて、コリヤ何を云ふ、最前御老人の詞何と聞く、親子の縁はもう切れてあるはい、尤も路銀は貯へたれども、主人より頂戴の金子、一錢も貢ぐ事ならぬ、ア、嬉しやけふといふけふ、厄介を払うて心がさつぱり、義理もへちまも一本立、女房そちにも暇くれた、イヤサ驚く事はない、科の仔細を云ひ聞かせば、かへつて身が武士が立たぬ、他人に何にも聞く事ない」

と、ちりはひ付かねば母親は、顔打眺め、  
「これはまたきつい思ひ切り、尤も父御へ不足はあ

らうが、嫁に何の科がある、さう云はずと、機嫌直してどうぞけふ一日逗留してたも、コレ嫁女止めやいの、エ、マ気の付かぬ」

と、様子しら髪の毛の、気を汲んで、涙片手に夫のそば、水の出端へ茶の花香、そつと差出す追従も、身を捻ぢ向いて洗面顔、取付く島もないじゃくり、詮方なさに稚子を、抱いて出ても見た計り、愛想なければ恨めしげに、

「コレ太市、ソレ父様が戻つてぢやはいの、オ、抱かれたかる／＼、なんぼ抱かれたうても父様は、抱きやさしやんせぬ、侍の立たぬと云はしやんすも、なるほど無理とは思はねど、腑甲斐ない女子の手一つで、お宿老のお二人に、御不自由な目がさしともなき、いろ／＼さま／＼に身を砕くはナア、大概お前も、推量してくれたがよい、身に曇りない言訳が

したうても、どうもならぬ、腹が立つなら堪忍して太市は可愛うないかいな、お前ばかり出世して、子は飢ゑても構はずか、辛い貧苦を少しでも、思い遣りがあるならば、三つ四つの重ね着を、一重は脱いで朝夕の、烟の代とおつしやつても、さのみ惜しうもあるまいに、余り惨い愛想づかし、さほどつれないお前でも、この子が親と思へばこそ每晚熱のうはごとにも、父様呼んでと泣くはいの、コレ胴欲な、父御の傍へ往て、母が詫言してたも」

と、押しやれば、這ひ下りて、  
「父さまなう」

と縋り付く、恩愛血筋の一声は、名作の鋒に切付けらるるごとくにて、鉄石のやうなる重太郎、涙をこたへ兼ねけるが、気を取直し突きかけて、

「親の事さへ思はねば、まして倅が事何とも思はぬ、

縁切つて仕廻うたれば、薦被らうが飢ゑうが、この方に構はぬこと、くどう云ふな」

と睨め付くる。母は興さめ、

「コリヤ重太郎、さてもく今までは、又とない孝行者と思うたが、貧しい親を見限つて、一人榮華をする気ぢやな、エ、見違へた道しらず、浪人すればそのやうに、さもしい心になる物か、望み通り親子でない、勝手次第に出て行きをれ、子と思はねば恨みはないが、天道様のお憎しみで、身の行末が思はるる、エ、浅ましい人でなし」

と、煙管打付け声ふるはし、

「アノ畜生に構はずと、嫁こちおぢや」

とばかりにて、恨み泣くく立って行く。返答もせず表の方、出て行く袂を女房引きとめ、

「去られた夫を止めはせぬが、出て行く気なら、こ

の子を連れて行かしやんせ」

「ヤアたはけ者、去つたからは子でもないはい」

「イヤくく男の子は男に付く世間の大法、水仕奉公してなりと、お二人を養ふに、この子があつては枷になる、せめて庖瘡子の介抱は、親の不肖ぢやさしやんせ」

と、門へ突出しびつしやりと、さすが気強う云ひながら、戸の隙間より差覗き、

「コレそれが迷惑なら、今一度思案仕直して、立戻る気はないか、心強や」

とかつぱと伏し、声も得上げず忍音の、心奥より父の声、

「おりゑくく」

と呼ぶ声に、

「アイくそこへ」

と云ひながら、わが子に名残後髪、せはし泣く間も  
姑が

「嫁女〜」

と是非なくも、思ひ切つてぞ奥へ行く。さしも義強  
き重太郎も、わが子の枷に縛られて、行きも得やら  
ず抱きしめ、気は暗闇となりける。

折からすた〜せきに関内、

「余り時刻が延びますから、大鷲様、小寺様、栗  
田口まではや御立ち、拙者も御両人の御供、不躰な  
からお先へ参る」

と、云ひ捨てて引返す。

「南無三宝おくれしと、傍輩の嘲り何とせん」

と、顛動散乱納戸口、病ひの床を這出づる、父の喜  
内が探り足、隔てぬ中の内と外、太市郎が肌押しく  
つるげ、口に称名手に小柄、胸を極めて眼を閉ぢ、

突つ込む鋒、稚子の、ただ一声に息絶ゆる、死骸と  
共にどうど座し、泣声一度に父喜内、

「重太郎出かした」

と、わつとばかりにむせ返る、はつと驚き立上る、

「ヤレ待て暫し」

と、戸を開き、

「古主の為に親を捨て、現在の子を手にかくる、そ  
の丈夫な魂なら、敵師直を討損ずる事あらじ、オ、  
それでこそわが子なれ、あつぱれ忠臣出かしたり、  
忠義の旅の餞別せん」

と、懐中より金子取出し、

「コリヤこの金はな、主君御生害と聞くより、直に  
かの地へ駆付けんと、旅の用意に貯へしが、はから  
ず老病差発り、空しく引籠みながら、この年月  
の貧苦にて、たとへ飢ゑ死するとも、忠義の金には

手をかけまじと、女房嫁にも隠した路金、サ御用に立ちやれ」

と投出せば、重太郎飛び退り、

「ハ、ア割符を合す忠義は一体、拙者もここに五

十両、この金は大星殿より配分の用金、私事には遣

はれずと、母にもつれなくもてなせしが、父の心を

籠められし、その金子を申し受け、肌身に付くれば

親人も、敵討の御供ぞや、この金子は御老体へ、拙

者が寸志の置土産、倅が追善仏果の為、お頼み申し

奉る、さてもさても武士の、義理程つらきものはな

し、連判の侍小寺、大鷲、拙者など、かの師直に

よしみある薬師寺が城中へ、或ひは日雇、乞食に身

をやつし、鎌倉のやうす聞き繕ひ、大星殿へ日毎の

内通、親妻子にも語らじと、誓紙の手前母人にも、

包みし段は真平御免、大事を抱えて古郷へ帰る、不

覚者と最前の御意見、肝に銘ぜしゆゑ、手にかけてし倅は主君の追腹、未来の先陣よくしたな、追付敵を討ち課せ、すぐさま切腹仕り、冥土より吉左右を申し上げう親父様」

「オ、必ず待つてゐ申す」

と、親子手に手を取組んで、思はず知らずはらく

と、嬉し涙の暇乞ひ、障子の内にもわつと泣く、声

に恟り立退けば、

「なう重太郎、女房子にも隠す大事、母も出まいと

思つたれど、おりゑが自害、おりゑが自害しやつた

はいの、死顔に一目暇乞ひ、それ程の事は不忠にも、

わしやなるまいと思ひます、おむつここへ」

と二人して、昇ひいて出でたる亡骸に、書残したる

藻塩草、浮橋取上げ涙ながら、「エ、『父様母様申

し残し候ふ。先立ち候ふは、不幸に候へども、夫の



心底立ち聞き致し、恨みは晴れてこの身の申し訳立ちがたく、これもお二方お貢ぎの為、浅ましい立君の世渡り』

「ヤア、そんなら親父殿の介病に、賤しい辻君の勤めまで仕やったか、賤しい辻君の勤めまで仕やったかいなう」

『往來の人に合力を受け、肌身は汚さず候へども、夫の疑ひを受け、これのみ迷ひの種になり候ふ。わけて悲しきは太市郎、疱瘡もかせ口になり悦ぶ甲斐もなきわかれ』オ、道理／＼、生ひ長きある子を殺して、何の生きてゐる心があらう、可愛や／＼ナア」

「エ、』一つけさ買うて帰り候ふでんぶの曲者、膳棚に御座候ふ、父様の菜の物にお上げなされ下され候ふ、一つ裾の切れし私が袷、坊が余所行に縫ひかけ置き候ふが、心がかりに候ふまま、死骸に着せて

御葬り頼み上げ候ふ。御介抱申す人もなく、御不自由の程、いかばかり悲しけれども、一時もはやう冥土の殿様へ、夫の心底申し上ぐるを樂しみに相ひ果て候ふ。重太郎殿へは面目なさに、何事も書き残さず候ふ』

めでたくかしくの終りまで、夫に立つる眞実の、又と類ひもない貞女を、一日安堵の思ひもなう、辻君とまで身をなして、朽ち果てさせし可愛やと、空しき死骸に抱き付き、前後不覺に取り乱す。喜内涙を押しぬぐひ、

「主人の為なればこそ、傾城となり非人となり、立君となる心遣ひ、かほどの忠臣重太郎を、子に持つたこの親父、我もちつとも悲しうない、死んでのあとの名こそ惜しけれ、祝うてめでたう別れの盃お婆つぎやれ」

と取り上げて、奥歯漏れくる謡ひ声、

実に名を惜しむ弓取りは、誰もかくこそあるべけれ、  
あら優しのが子や、健気やと泣かぬ顔する父親の、  
にこにこ顔もこの世の名残り、

「ハ、ア仰せにや及ぶべき、わが子の絆しを切つた  
れば、心の鉄石十倍増、主君の敵のその上に、妻の  
敵子の敵、一時に討つ門出と、思へば心にいさみあ  
り、たとへ天地をかけるとも、念力通つて師直が、  
首引提げんはまたたく内、はやおさらば」と立上  
がる。「もうお行きやるか。やがてめでたう、吉左  
右々々々」その吉左右とは愛し子が、命を捨てに  
行く旅路、冥土の案内は嫁と孫、三途の川を急ぐら  
ん。可愛と見やる野辺送り、今朝は祝ひし神送り、  
門に捨てたる猩々も、涙の種の笑ひ顔、しをれ勇ん  
で出でて行く。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。